

## 青年ミヘルス研究——1906年

氏 家 伸 一

### （1） は じ め に

1905年3月31日、皇帝ウィルヘルム二世による、突如のモロッコ・タンジールへのスルタン訪問は第一次モロッコ事件を引き起こした。国益をめぐる帝国主義国間の衝突は、独仏の社会主義者にとって試練となった。ミヘルス自身も、衝突回避のため、奮闘するが、その甲斐も無く、ドイツの社会主義者との距離がますます広がっていった。

他方で、マックス・ウェーバーとの長きにわたる親交が始まり、『アルヒーフ』へ投稿するようになる。それは、より学問的な仕事への取り組みを意味していた。

さらに、バルトラフランス・サンディカリスト・グループとの理論的齟齬は、ミヘルス社会主義を一層深めていくことになる。

そして、この年、ついにミヘルスはイタリア・トリノ移住を決意した。

ウェーバーは、この年1月24日付けの手紙でミヘルスにこう書いている。

「社会民主主義者がまさにそのために、教授資格の獲得を妨げられるという事態は、わが大学におけるいわゆる<学問の自由>をまさに物笑いの種にするということ、これについては私が意見を言うまでもない。こういう状態は、イタリア、フランスそれどころか今ではロシアの情勢と比較してみると、文化国家として不面目この上ないと思う。この点に関

しては、個人の政党への姿勢の違いにかかわりなく、ドイツ学界における最良の人物の大多数の賛成を得られると私は確信しています。……

このような事態に対しては、かつてホーエンローヘ侯爵が1878年の社会主義者鎮圧法に関して、ちょっと丁寧すぎるが、<ドイツ・ブルジョアジーの臆病さ>と呼んだ気分が、大いに責めがあること、これは確かだ……。」<sup>(1)</sup>

## (2) モロッコ危機とミヘルス社会主義

先にも述べたように、06年初頭、青年ミヘルスの精神をとらえたのは、モロッコ事件とドイツ帝国主義の勃興、そしてそれに対する社会主義者たちの対応であった。

この危機を分析し、危険性に警鐘を鳴らし、反対運動を促すためにミヘルスは交際的な活動に力を注いだ。

先ずイタリア人に、“Riforma Sociale”誌上で、それまでの情勢分析から、総括的な考察を行い、イタリア人読者に報告した。(「ドイツ帝国主義とモロッコ危機」, N.179)<sup>(2)</sup> ウィルヘルム二世のモロッコ訪問は、「全欧州の外交をひっくり返した。」戦争への危機感が諸国民の間に沸騰したが、ミヘルスこう断定する。「現代の状況の深刻さは、その発生源をほとんどもっぱら、ドイツの公的世界に求められねばならない。」ミヘルスによれば、資本主義は「戦争への芽」を本来的に有するのだが、加えて、ドイツには、「戦争に寄生する特殊なカースト」、投機家や軍人が存在する。

ところで、ドイツのブルジョアと中間層は概して「好戦的な精神」に染まっている、とミヘルスは語る。たとえ、戦争好き belliose ではないとしても、軍国主義的 militaristi である。ユンカーとドイツ・ブルジョアジーはドイツ独特の「予備役将校の制度」によって、容易に軍国主義に染まる。この制度が彼らに「軍人氣質、強い規律の精神、愛国主義」を植え付ける。これは、ドイツ・ブルジョアジーの青年が世間（政

治、官僚、司法界)で出世する条件である。この軍国主義的体制統合には、女性(軍人の妻)も組み込まれる。彼女たちの会話では、夫の肩書き付きで呼び合うため、あたかも、「アマゾネス」のドイツにいるような錯覚に陥る、とミヘルスは紹介している。

これは、社会主義プロレタリアートを除く、ドイツ人一般にみられる現象である。それが「ドイツ軍国主義の基礎」をなす。絶対王朝の歴史意識は「反抗の情熱を圧殺し」、「権威、力、規律と呼ばれるすべてのものへの尊敬の念を魂深く植えつけた。」

この「軍国主義的精神状態」は、ドイツの汎ゲルマン主義と帝国主義の基礎にあるのだが、ドイツ帝国主義はいまだ「虚栄」の段階にとどまっているとミヘルスは指摘する。ドイツ植民地は「経済的価値」が無いからである。「虚栄」の中心的担い手は皇帝である。しかし、彼の権威はドイツ人の奴隷根性、甚だ無力な議会、権威主義的な憲法に支えられている。このようなドイツの軍国主義と帝国主義の脅威に対し、平和主義の力はどうかというところ、「この主人にしてこの召使」、である。ドイツで平和主義の運動が成功した例はない。国際的な平和会議への参加も取るに足りない。さらに、軍需中心の予算は、「制度としての軍国主義」を保証している。

さて問題は政党の姿勢である。「ドイツの世論は存在しない」とくりかえして、ミヘルスは次のように主張する。ドイツ・ブルジョアジーとその新聞も「愛国主義」という大きなマントの背後にかくれている。「平和」の言葉は、「偽善」でしかない。唯一、ベーベルが海軍の軍需費増額に反対した。しかし、反軍国主義政策では、SPDは孤立している。

そもそも、資本主義経済は戦争の時ほど、その「搾取の本質」を暴露する場合は無い。プロレタリアート自身が「自分の労働から盗まれた富を自分の血で守られねばならない」からである。SPDは、「この搾取の集積としての戦争に対し戦線を布告する。」最後にミヘルスは、戦争の

可能性を阻止できるのは次の三つの要素である、という。

- 1) フランスにおける平和主義,
- 2) 仏英同盟,
- 3) ドイツのプロレタリアートの「戦争するなら反乱へ」の覚悟, である。

ドイツは、ツァー・ロシアの崩壊後、ヨーロッパでの「反動の城砦」を代表する。産業の驚異的發展にもかかわらず、封建的なカーストが優位する体制は変わらない。他方、SPD 党員は大学職からも排除され、田舎のプロレタリアートには団結、ストの権利すら認められていない。ミヘルスの戦略は、プロレタリアートと民主的な市民との連合による反動ドイツの打破にある。

しかし、ドイツのブルジョアジーは、歴史的にも政治的にも、その任に不適である。中央党の分析がそれを証明した。他方、ドイツの愛国主義は、ミヘルスの理想とする、フランス革命時に見出された民主的な愛国主義とは全く別物である。(後述)

ドイツの代表的ブルジョア政党である「中央党」について、短い紹介文がイタリア人向けに書かれている。「カトリックとドイツ帝国議会の解散」(N.178) 本年末の政争に絡んだ記事である。

ドイツ「市民」の政治的な力で重要なのは、カトリック政党、「中央党」である。この政党は06年秋、軍備費予算案を拒否し、帝国議会を解散に追い込んだ。

国民の1/3を占めるカトリックの代表である中央党は、「第二の政府」と呼ばれるほどの議会勢力を誇示してきた。プロイセン政府とは、宗教政策と関税政策ではほぼ同一歩調をとってきた。しかし、他の政党が「社会階級の基盤」で形成されたのとは違い、中央党は言うまでも無く、宗教的基盤に基づく。従って、封建勢力から、ブルジョアとプロレタリアのカトリック教徒までを含む。カトリック系のプロレタリアは、今回党の反対姿勢を歓迎したが、ブルジョアはディレンマに陥る。というの

も、党内のブルジョア・デモクラシー分子は帝国主義に侵されてきたからであるとミヘルスは分析する。「国内では民主主義，対外的には世界権力」のディレンマである。一方で民主的な外交政策，他方で拡張主義的で好戦的な政策，国内での反封建政策と国外での封建的政策，この矛盾のため，政府は，解散後の選挙でも影響を受けずに済んだ，という。

さて，すでに述べたように，05年末より独仏関係が悪化し始めたが，仏の労働総同盟（CGT）書記グリユフェールがバルリンに赴いた。軍国主義と戦争に反対する独仏両国の労組が共同行動を起こすように働きかけたが，失敗した。

ドイツの労組は国内問題（選挙法改正とゼネスト問題）に忙殺されていたからである。そもそも中立主義をとるドイツ労組は外交をカイザー政府の専権事項を考えていた。<sup>(3)</sup>

日露戦争終結後，ロシアにおいては政治的大衆ストライキが憲法制定と国会開設をかり取っていた。この革命的動きはさらに西へと波及し，オーストリアと独にも影響を与え，各地で労働者大衆による政治運動が展開された。SPD 執行部はまさに「政治的大衆ストライキ」の選択を迫られることになった。しかし，独の組合指導部は帝政国家との決裂を避けるため，前年の SPD イエーナ大会の政治的大衆ストライキ決議案を無視する行動に出た。そして，06年2月，組合総委員会と党執行部との間に，政治的大衆ストライキに関する秘密会議がもたれ，これを実質的に不可能にする協定が結ばれたのである。<sup>(4)</sup>

ミヘルスは06年初頭，このモロッコ危機に際して精力的に活動した。とくに，好戦的なドイツ人という固定観念を払拭するよう，フランスで講演し，仏語の雑誌に書いた。

“L'Euopéen” の1月20日号に「独の対仏戦争」（N.167）を書き，「戦争はあるのか？独の社会主義者の態度は？」というフランス人の「不安感」を緩和しようと努めた。ドイツ人民は元来が「平和的」で親

仏的であった、という。ただ、政治的に未熟なため、政府の操作ですぐ好戦的になる。人民の声を反映すべき議会は、「立法権も世論」も持たない「茶番」でしかない。そして、ドイツの中央権力はプロイセン貴族といくつかのトラストの「執行委員会」である。そこで問題なのは、あの300万票を得た「巨大な社会主義政党の弱さ」ぶりである。このモロッコ危機に対して党は、「沈黙と不動性」へと逃避した。ミヘルスは、これに「弁明の余地はない」と弾劾する。しかし、他方、ドイツのショーヴィニズムに抵抗できるのは、この労働者の運動しかない。したがって、労働者運動の反軍国主義と平和志向とをどう維持強化するのか、が緊急テーマとなり、その方策として大衆ストが想定されよう。しかし、そのイエナ大会決議案が今葬り去られようとしていた。

ついでミヘルスは、同じフランスのサンディカリズム系雑誌“Le Mouvement Socialiste” 2月10日号に「独社会主義者と戦争」(N. 168)を書いた。そこでミヘルスはグリュフェールのベルリン詣で事件に触れている。この事件こそ、「SPDの戦争と軍国主義への姿勢」そして「独の労働者の実際の感情」をあらためて浮き彫りにしたからである。

グリュフェールは、独の組合総委員会に二つの提案を行った。

- 1) パリとベルリンでのデモ、
- 2) 両国の組合の合同大会、である。

CGTが提案した相手が、SPDではなく、組合であったのは当然であったように思える。が、当のドイツの労組はそうは考えなかった。ドイツの労組は、CGTのように「社会主義の熱望」ではなく、中立的姿勢を固持していた。よって、反軍国主義のような「政治的本質」を有する行動は自分の管轄には属さない、SPDに頼むべし、と。

確かにフランスでの反軍国主義は党よりも労組の手にゆだねられていた<sup>(5)</sup>。しかし、SPDの国家議員ジンガーはグリュフェールの提案に「絶対拒否」でこたえたのである。しかも、ドイツの労組と党がグリュフェ

ールの提案に反対の論拠として持ち出したのは、管轄の問題、規則の問題であった。ミヘルスはこれを「無価値の口実」の先例と批判している。

しかし、この直接行動に対するドイツ側の否定的姿勢は前年夏よりはっきりしていた。フランス、イギリス、ベルギーの社会主義者たちによる、ドイツの社会主義者を巻き込んだ反戦の統一行動にドイツ側は悉く拒否の態度をとっていたからである。06年1月のフランスのヴァイヤンの（「戦争にはゼネストを！」）の提案も拒否された。

結局 SPD は「国際社会主義者により繰り返されたアピール」には一切耳を貸そうとはしなかった。軍国主義と戦争の問題に関しては「心底からの無気力」を暴露しただけであった。

前年の12月初め、ベーベルは政府のモロッコ介入の仕方を批判して「ドイツの労働者が祖国で現有する権限は不十分である」と弁じた。ミヘルスはこれを、あまり革命的ではないと評した。そして、いつもの自問を繰り返す。「いったい全体、何ゆえに、ドイツの社会主義者（300万票）と労組（100万人）の強大な軍隊はこれほどまでに麻痺し無力になったのか。」

SPD の持論はこうである。300万票でも、900万票の保守勢力にたいしては「弱すぎる」。反軍国主義キャンペーンという「大事業」は、「狂気の沙汰」以外の何物でもない。それはリーダーを投獄し、金庫を空にし、そして組織を解体してしまうであろう。

ミヘルスも一面でこの認識を共有している。ロシアに次いで、ドイツは「ヨーロッパで最も反動的な国という名誉を得ている。」具体的にはブルジョアジーとユンカーの連合がその反動の中心勢力である。両者は対プロレタリアートで堅く結束している。

しかし、ミヘルスはこの説明でも不十分とする。この事態には SPD も責任の一端があるのだ。つまり、政府も SPD も互いを過大に評価している、双方とも「恐れるに足りない」のではないかと。ここでミヘルスは（おそらくウェーバーの）、「あらゆる政府はそれに値する社会民主

主義者しか持たない」との言葉を引用している。

従って、SPDと労組に最も欠けているのは、「自信と革命的精神」、  
「犠牲的精神と英雄的精神」ということになる。

このドイツ社会主義と労組運動の無力さの究明にこそオリガーキー命題の淵源が存在することは最早言うまでもないだろう。「本物の階級闘争という活動領域を放棄し、議会と労組の官僚制という快適なマンションへと引越し、何百万という戦士の力を一握りの幹部の手へと集中していく」につれて、ドイツの労働運動は保守化してくるのである。

「党と労組の機構は、その金庫が一杯になるのに応じて、鈍重になる。数え切れない数の職員が、今日、党と組合で暮らしを立てている。したがって、もしそれが、非常に人間的であるなら、——私は率直に認めるが——その大量の職員たちが、自分の確実な地位を大胆な活動によって容易に危険にさらすような決意はしないというのは、やはり真実である。ほんの些細な煽動も、儉約家のプチブル風の細心さでこせこせと蓄えた金で一杯の金庫を不安に陥れる。例の有名な《軍資金》は、ますます、戦いのための武器庫から、それ自体が特別の愛着の対象となる。それは、何よりも真っ先を守るべき、そして危険にさらしてはならない、そういう金羊毛となる。ドイツのプロレタリア運動のリズムが、こういう甚だしい金融家の精神によって、鈍重となり、止まってしまうのに不思議があるか。組織愛が、自発的活動に衝突しないわけがあるか。投票者と資金を失う恐れ、これが SPD の〈最高法規〉である。その、無気力な戦略と受動性を説明するのはこの恐怖である。SPD を——その、驚異的な人的財政的資産にもかかわらず——、社会主義政党の中でもっとも弱い政党へと変えたがために、その戦争と軍国主義への姿勢を解く鍵を与えるのが、この恐怖である。」

2月21日、ミヘルスは再びパリで講演を行った。それが『フォアヴェルツ』に紹介されたが、この記事は、ミヘルスによると、「誤解」に基

づくものであり、そのため多くの新聞・雑誌での「激しい非難」を触発した。誤解が余りに甚だしかったので、ミヘルスは「ももとのテキスト」を5月に“Die Einigkeit”紙に5回に分けて掲載することにした。(N.170) 誤解の背後には「社会主義者と中立的な労組の幹部との戦い」があるとミヘルスはみている。そのため論戦は「偽善と罵倒」を伴って行われたようである。こういう背景のもとで、ミヘルスの政治的孤立は一層すすんだと考えられる。

この講演の目的は単純明快であった。モロッコ問題による「危険な時期」にドイツ人は「何という冷静さを保っているのか。」グリュフェールによる「フランス労組の切羽詰った訴え」に対して、ドイツの「自由」労組幹部はただ無理解と無反応を示しただけであった。なぜか。ミヘルスはこの積明的添え書きで、フランス側社会主義者が抱く恐れのある——これを予防するのがミヘルスの意図——二つの「先入観」——一見相矛盾する——を提起している。二つの両極端な先入観とでもいえよう。ひとつは、楽観的、他は悲観的な、ドイツ社会主義観である。

- 1) フランスの反軍国主義運動はドイツにも呼応する運動を招くだろうとの先入見。この可能性をミヘルスは端的に否定している。この希望的観測による楽観的ミスフランス人におかせないことをミヘルスは自分の義務と感じたと述懐している。それを指摘することは「人間としての義務」であり、従って、「ドイツの労働運動幹部の感情と虚栄」を顧慮することは一切なかった、と。
- 2) こちらの方が大事なのだが、上とは逆の、懸念の混じった、SPD＝「愛国主義」との見方である。これを払拭することは容易ではなかったようで、フランス人にはさほど知られていない、ドイツ労働運動の環境にある特殊性を説明することしかできなかったとミヘルスは反省している。

ともあれ、フランス人に「ドイツにおける政治生活の特別な困難さ」を報告することで、その不活発ぶりを釈明したというのである。

さて、ついでその講演を少し詳しくみていこう。

何はともあれ、この講演の動機が「独仏間の戦争勃発」の危機感にあることを先ずミヘルスは語っている。従って、「両国の平和的發展の最強の城砦としてのドイツの労働運動」に注目が寄せられるのは当然である。それを理解してもらうためにはその「環境」を知る必要があるが、そこには「明確な内的矛盾」が存在するという。経済と政治の矛盾といえよう。

(1) 英国の「好敵手」となった、ドイツの急速な経済発展にもかかわらず、それには「資本主義型の国家」が対応していないのだ。「金のメダルの裏側は鉛製」とミヘルスは表現している。「国内法と政治的道義の習慣」の面ではあまりに「中世的」な状態。その点では、オーストリア、ロシア、バルカンと肩を並べる。これがドイツの労働運動の考察に不可欠であるとミヘルスは強調する。ユンカーに支えられたカイザーの「絶対権力」。議会は無力であり、戦争と平和の問題で唯一権限を有しているのは「王朝権力」である。事態を一層悪くしているのは、ドイツの「ブルジョア政党的無力さ」である。それらは自由の保持と憲法に無頓着である。

また各邦の憲法と選挙制度も不備であり、労働者は排除されている。(よって、労働者の参政権という先のベーベルの要求には根拠があるともいえよう。)

以上の国政に次いで、「政治的権利」の問題に移る。女性の政治参加はいうまでもなく、通常の集会でも制服警官の立会いなど(フランスではあり得ない)、権利の制約が甚だしい。さらに、農業労働者もほとんど無権利状態である。フランスでは恒例の賃金運動やストライキも禁止されている。ユンカー支配による野蛮な農奴制がいまだに存在する。

一方、君主制も、他の欧州国では「立憲制」だが、ドイツでは依然として「神権制」が信ぜられている。よって、ドイツはその生産力にも拘らず、資本主義国家からはほど遠い、封建制に他ならない。

(2) では、その資本主義を担うドイツのブルジョアジーはどうか。ブルジョアジーは、軍幹部を独占する旧貴族層と巨大なプロレタリアートとの間で立場を危うくさせている。自信と独立心をもはや持たない。

ブルジョア「民主主義の原理」は、従って、SPDの課題ともならざるを得ない。

ミヘルスはフランスの民主主義、「血で買った民主主義」を羨ましく思うとフランス民主主義を賞賛する。しかし、ミヘルスは原則を思いださせる。つまり、ブルジョア的「民主的自由」は所詮、ブルジョア的という歴史的限界を有する、と。従って、ミヘルスの革命戦略は二段階となる。「我々ドイツにとって、民主主義は獲得に値する目標である。その上に、さらに構築を進める土台である。民主主義は我々の勝利の前提であり、それはドイツの歴史的必然性に合致している。」

このようにドイツのブルジョアジーが「ドイツの憲政と国民の政治的慣習の民主化」に失敗したからには、SPDがそれを引き受けざるを得ない。このことは、SPDが社会主義者のみならず民主主義者と自由主義者の結集点たりうることを意味する。(SPDの党員と支持者層の社会的構成分析の問題意識はここにもあるといえよう。)

SPDは、社会主義とともに「民主主義という重要な役目」をも引き受けることになる。ここから、ミヘルスの戦略的ジレンマが生ずる。自由民主主義支持か、それとも反議会主義かである。

フランスのブルジョアジーと違って、ドイツのブルジョアジーは堅固な「反動的団塊」である。よって、対ブルジョアの戦いで、議会での勢力増大が重要課題となる。

ともあれ、SPDは議会というブルジョア的制度によって強くなった。その原動力は組織、官僚制、規律である。要約すれば、巨大な組織のおかげである。

そして、同じこの力が弱点の基でもある。緩慢な活動、「自己自身の心配」、不活発。以上は党と政治的環境の分析であるが、次いで労組に

移る。

(3) 党と並んで「労働運動のもうひとつの枝」をなすのが労組であることはいうまでも無い。しかし、独仏では労組のあり方と目標とがまったく異なることをミヘルスは強調する。フランスでCGTが代表するサンデイカリズムは「公然と社会主義的で革命的」である。対してドイツの労組は資本主義内での生活改良を目標とする。「最終目標」としての社会主義にはまったくこだわらない。この社会主義放棄は「とてつもない危険性」を有するとミヘルスは警告する。

この労組の幹部は、多くのSPDの国会議員と官僚層を供給する。

そして、ドイツ労組の業務である相互扶助についてミヘルスは否定的である。「旅行扶助、失業扶助、疾病扶助、死亡基金その他の相互扶助制度のすべては非常に有益な制度だが、ますます労組から戦闘心を奪うし、ますます労組を保険会社たらしめている。」この制度は驚嘆すべきものだが、「経済を資本主義から社会主義へと発展させるという観点からみると有害とみなさざるを得ない。」これが分からない者は、「正義が分からない」人だと断じている。

ここでミヘルスは党と労組の違いに触れて、後者の方が組織としては「より厳格で、より中央集権的」と判定する。しかも、「巨大でよく組織された労組」であるが故に、「平和主義の精神」を損ねる戦術は峻拒する。「これは、あらゆる巨大組織が内包する深刻な危険性の存在を証明」すると、組織の保守性命題を提起する。換言するなら、「組織と自己自身の存立と、労働運動の存立そのものとを同一視する」職員層に生ずる危険性のことである。

ここでミヘルスは、「ひとつの明白な」真理として労組の運動には社会主義という偉大な理想が不可欠であると主張する。それが無いと、運動は日和見主義を宿命づけられる。その理想はまるで「太陽の光」のように、運動に意味を与える。

(4) さて最後に、SPDが愛国主義的だとの先入見にたいして、その

誤解を解く仕事にとりかかる。

ミヘルスは先ず、ベーベルとリープクネヒトの「英雄的な」反戦平和の戦い、「民族自決」という「民主的で道義的な原則」のための戦いに触れている。

続けて SPD のインターナショナルな公式方針を述べて、SPD＝愛国主義を誤りと拒否する。

戦争は資本主義と関係している。しかし、公式的説明ですむ話ではないことは、周知のことになった。ここでミヘルスは、第二インター・アムステルダム大会（1904）でのジョレスによる SPD（ベーベル）批判を思い出させている。巨大な SPD は何故「沈黙」しているのか。組織が未だ弱体であるとの信念に基づく「組織解体への不安」は、党と労組で強力である。労組は、111万人と大金庫の組織を有しているし、それを防衛せねばならない。最高に封建的な軍国主義体制のもとで、その不安はいつでも現実になりうるというわけである。革命的行動にとっては「著しく不利」であることはいうまでも無い。

結論としてミヘルスは、イタリア人アントーニオ・ラブリオーラの説を紹介している。それはこの20年間の経済発展がもたらした「三大悪」のことである。

それらは、そもそも西欧近代のもつ根本矛盾を意味しているといえよう。

- ① 土地身分と資本主義、
- ② 愛国主義と軍国主義、
- ③ 普選による「デマゴグ」。

この三つの邪悪と三つの大嘘を強調しているのは、それがフランスよりもドイツでとりわけ顕著との認識があったからである、と考えられる。フランス人にこそそれを理解してほしかったのだろう。ドイツの改良主義にたいして、フランスの革命主義（「進歩のフランス、社会主義的フランス、労組とプロレタリアートのフランス」）を称揚するミヘルスだ

が、「戦争を防ぐために全力を捧げる必要がある時に、「中立的」など、問題にもならぬ」と、ドイツの自由労組を弾劾して、論考を締めくくっている。

パリでの2月21日の講演は、ベルンシュタインに、「非常に鋭い論文」を書かせたが、パリのドイツ人読書クラブを怒らせた。

ベルンシュタインの論文は、ミヘルスの主張に対して、賛否両面の評価を含んでいた。ベルンシュタインがミヘルスを支持したのは、SPDの「不活発さ」批判と事実認識に関していた。ベルンシュタインも、SPDには「言葉は革命的だが、行動は改良主義的という二律背反」が存在するという、ミヘルスに同意する。しかし、そこから引き出された結論が、ミヘルスを「失望させる。」ベルンシュタインは、党の「一切の革命的言辞」を片付け合法性と議会主義と改良主義の路線を固持せよと主張する。ミヘルスによれば、ベルンシュタインは、一方でSPDの「無力さ」に対する批判に同意しておいて、他方で、力を得るために「闘争」の精神を捨てよと勧告する矛盾に陥っている。

ミヘルスは自分の講演がパリのドイツ人クラブを怒らせたのも無理がないと認めている。SPDの力を、ことのほか誇大視していたからである。しかし、ミヘルスの方法は、「通常の習慣的な神話を断固放棄し、SPDをみたまま、あるがまま、その欠陥をも込みで、描写するのを」ためらわなかった。この科学的公平さは、「仏独両国のプロレタリアートの行動を一つにまとめるために」全力を尽くす努力と矛盾しなかった。

本来、こういうクラブが、危機に際しては、両国の労働運動の橋渡しの役を果たすべきだが、とミヘルスは弾劾する。ところが、甚だ緊迫した時期にこのクラブは、「政治的に死んでいた」のである。

ミヘルスはあらためてこの講演の意図を説明する。ドイツ人労働者の「真の姿」を、「つらい、粗野な面」を含めて紹介し、「フランス人の理性主義的ミリタン」に幻想を抱かせず、他方、誇張されたドイツのショ

一ヴィニズムに対する糾弾に対して、それを誇大視しないよう求めることにある、とした。ミヘルスはそれが、「私の国際主義的義務感」に命ぜられたこと、と述べている。「それは、私の唯一の方針」なのであり、「多数の労働者の運命が危うくなっているときに、党の虚栄など気にしない」と宣言した。

2月21日のパリ講演に先立って、ミヘルスは、2月12日、同じくパリの社会科学自由大学で、「ドイツ、社会主義と労組」(N.180)と題して話をした。当時のミヘルスの社会主義観とドイツ社会主義の現状分析を簡潔にまとめたものである。

フランスの無用の恐怖心を拭い去り、他方で、社会主義への国際的展望を願望するという複雑な意図がその動機になっている。

SPDとその環境の分析はすでに述べたので、ここでは、ミヘルスの社会主義観の特徴を繰り返すにとどめよう。

即ち、理論と実践の二面性と、その媒介装置としての組織(党と労組)という理解である。社会主義は先ず、「生産の無政府性を終わらせという目的をもち、生産者を生産の主人となさしめる理念と運動」と定義される。従って、「階級の外の運動」といえる。

第二に、社会主義は、プロレタリア階級の解放という目標を持つ大衆運動である。

前者の社会主義は、社会主義インテリを必要とする。彼らは、プロレタリア大衆に目的への行程を示す、つまり、「土壌を分析することによって、伴走する。」しかし、社会主義思想家の理念を実現できるのは、プロレタリア大衆のみである。

ミヘルスはこの両面で最も発達し、「壮年」の域に成熟したのが、ドイツである、と主張する。社会主義教義のうえでのみならず、驚嘆すべき「数と密度」を誇るドイツの組織されたプロレタリアートの存在の面でも、国際的な社会主義運動の中で、他に並ぶべきものなき優位を示し

てきた。

最大の社会主義教義であるマルクス主義について、ミヘルスはこう特徴づける。

- 1) それは、プロレタリアートの解放と収奪者の収奪の「科学的必然性」を「歴史哲学的」に確証した。
- 2) 価値論では、分配の不正と搾取の根源を究明し、プロレタリアートの勝利の確信を与えた。
- 3) 最後に、今のところ、いかなる経済理論によっても凌駕されていない。

このような教義を綱領とする SPD がインターで中心的地位を占めても驚くに値しないことになる。

ところが、国内での SPD の地位はその国際的地位とは比較にならないほど、低い。モロッコ事件で明瞭になった、この「ドイツ社会主義の無力さはどこからくるのか。」ミヘルスはそれを、ドイツの「専制的」環境から説明するが、これについては先述した

次いで、心理的環境。ドイツのブルジョアジーは、ユンカー封建的勢力に対してではなく、プロレタリアートに対してのみ暴力的で、不寛容で、精力的な階級的エゴイストになる。

ドイツ・プロレタリアートの心理も、権威主義という国民性を免れてはいない。革命的経験の欠如も、その服従心を強化する。

最後に、ドイツの社会主義勢力の分析に移る。先ず労組について、その目的は、階級的利益の獲得にこそあり、「未来の政治と経済の形式」には、一切かかわりが無いと考えられてきた。要するにドイツの労組は、社会主義に対しては、「中立的」というわけである。さらには、組織としての矛盾を支配するのは、中央集権主義と官僚制であることをミヘルスは指摘する。

大学関係者はこのような保守的な労組の中に、「社会主義革命と社会主義政党」に対する防壁をみている、とミヘルスは語っている。この

「中央集権化した巨大な労組」は、階級闘争に対する「冷却材」を提供する。革命への情熱とエネルギーはすっかり消えうせた。

「なるほど組織と財政の精神は驚くべきものとはいえ、労組の官僚制は、官僚制のメカニズム——そのもとなる組織と財政を失う恐怖——を免れることはできない。」

つまりドイツの労組にこそ組織の保守的性質というオリガーキー命題の中心的要素が見出されるわけである。

では、党のほうはどうか。ミヘルスは、労組にくらべると、党に対してははまだ、楽観的である。「政府に対しては、決して精力的でも大胆でもないが、SPDは未来へのあくことなき信頼と仕事への不撓不屈の精神で、社会主義の観点からみて、労働運動とは有利に区別しうる。」

ドイツにおける労働運動の二つの組織は、一方は右を他方は左を歩く「二肢」のようだとミヘルスは形容している。そして、この分裂で漁夫の利を得るのは、封建的な体制そのものに他ならない。

しかし、未だにこの時点でミヘルスは、ドイツの社会主義運動に絶望していない。階級対立が存在する限り、問題は解決されていないからだ、と。

ミヘルスは唯一、ドイツ・プロレタリアートの自覚に期待をつないでいる。

### (3) 政党社会学の開始

この年、『政党の社会学』に直接つながりそうな研究がなされたことは、注目に値する。

ミヘルスによるイタリア社会主義研究で最初のまとまったものが、アルヒーフに発表されたのは、06年の初めであった。逆説的なタイトルは「イタリア社会主義運動におけるブルジョアジーとプロレタリアート」<sup>(6)</sup> (N.166) である。その冒頭の第一テーゼはこういう。「社会・経済的に抑圧された社会階級のすべての解放運動は、その原動力と指導層を、台

頭する階級自身からよりもむしろ、攻撃された旧社会層の胎内から受け取るということは確固とした歴史的事実と考えられる。」

いうまでもなく、マルクスのプロレタリアートの自主的解放という主張への挑戦を意味する。(ミヘルスがそれを意図していたかどうかは、ここではどちらでもよい。)

上の命題は、なканずくイタリア社会主義の体験的研究から導き出されたものであることは間違いない。初期イタリア社会主義でバクーニンが有する歴史的意義にミヘルスは注目する。というのも、アカデミカーや他のブルジョア圏出身の青年が社会革命で果たす役割を誰よりも高く評価したのがバクーニンに他ならなかったからである。バクーニンは、インテリを「労働運動の存立条件」と信じていた。ミヘルスはこれを引き継いだ。

インテリと労働運動の関係について、ここですぐに付け加えておかねばならないことは、バクーニンがインテリに指定した媒介的役割に關している。すなわち、それは、

「人民の生活そのものから生まれた思想の助産婦の役割、プロレタリアートの無意識で強力な熱望を混乱の段階から明確な段階へと高める」という役割である。(S.348-9)

ともあれ、ミヘルスによれば、イタリア社会主義における学生と青年は特別の研究に値するが、それは、運動での「理念」の優位に關している。

ミヘルスによれば、第一インターのイタリア支部は、アカデミック青年と都市労働者、農業労働者の力が強い。<sup>(7)</sup>マルクスは(そしてカウツキーも)、このインテリ青年分子をデクラッセした、グータラとみなしていたが、ミヘルスは、彼らを優れた人格の持ち主であり、「勇氣、忍耐、謙虚、無私、犠牲的精神」にあふれていると高く評価している。(S.367)

この評価はミヘルス自身の社会主義観を示唆していることは強調しておいてもよからう。

イデオロギーとしての社会主義は、「論理的には決して近代プロレタリアートの存在をあてにはしていない。」しかし、「経験的、歴史的には」プロレタリアートが存在していない国での社会主義政党は「温室栽培の植物」に過ぎない。(S.373)

続けてミヘルスは、現代社会主義の「由々しき」特徴として、「理想主義的な意志的行動」と「教育」に対立する、「大衆の経済的エゴイズム」を指摘している。

第二の、農業社会主義の色彩が強いイタリア社会主義について、二つの特徴が述べられている。まず、イタリアの農民が他の国に比べて非常に都市的であるということ、従って、イタリアでは都市と農村の対立が社会主義の障害にならないということである。第二に、社会主義運動が工業地域でより農業地域で強いということ。そして、ミヘルスは、総じてイタリアの農民は、社会主義への感受性を強く持っていることを指摘している。(S.109)

さて、これまでのミヘルスの思想的発展との関係で興味深いのは、  
「(IV.) 社会主義運動の社会的構成の付随現象とその発展傾向」  
の部分であろう。

ミヘルスはまず、これまでのまとめをする。

イタリア社会主義運動は「社会的に統一された運動」ではない。指導部はインテリ的手中にあり、メンバーにはプロレタリア以外が多く、指導者は圧倒的にブルジョア出身者である。(S.665) このような組織上の特性は、その政党政策へどのように反映するか、または、そこでプロレタリア民主主義の危機という問題が生じないか。この問題設定自体、青年ミヘルスの体験と社会主義研究とが見事に統合した領分である。

(1) まず初めにミヘルスは、基本的事実の確認から始める。すなわち、どの国もその国特有の社会主義を有する、いいかえれば、普遍的な社会主義像などはあてにならないというわけである。

イタリアの場合はこうである。「素材上」の特徴として、すでに述べたように農民とインテリの比較的優位とするなら、「精神上」の特徴は、「倫理的契機」の優位にある。

しかし、ミヘルスは、このイタリア社会主義像には一定の一般的特徴が対応していると主張する。すなわち、「いかなる社会主義政党もその本性において倫理の党である。」

ミヘルスがマルクス以前のユートピアンと批判されるのもこのような彼の社会主義観に基づく。「倫理の党」をなす特徴は、「自らの階級に対する義務感、いわゆる連帯感」、そして、無階級社会という「理想」への「犠牲的精神」である。

この「邪悪に対する闘争」としての倫理的特長は、ドイツの社会主義者にすらみられるとミヘルスは述べる。ただ、イタリア社会主義でそれが比較的強く現れているだけである。しかし、青年ミヘルスをイタリア社会主義にひきつけたのは、この特徴であった、といえる。

この側面はさらに、教育的機能にも注目させる。というのも、イタリア社会主義は社会の改善のみならず、「人間素材の改善」をも目的とするからである。その意味でも、先に示唆したように、イタリア社会主義運動の特徴的担い手たる農民は、「懐疑的な都市労働者」よりも、道義心を強くもつことが、先の特徴に寄与する。

(2) イタリア社会主義運動内部での「階級闘争」とは、まさに逆説的な表現である。「政党社会学」の問題関心を印象的に表出している。これは、インテリに代表される改良主義グループ、対、サンディカリズム系の純労働者組織の党内矛盾と集約できよう。

この背景として、1898年以来プロレタリア党員が増加したことがある。それと共に、インテリの支持者（例、エイナウディ）が党を離れる。こうして後、修正主義と革命主義という「新たな危機」が始まったわけである。前者の代表トゥラーティは、対立する左派は、体制内で立身できなかつた、脱落したプチブル出身者で占められており、党は、出世主

業者の避難所と化した、と非難した。

こういう、トゥラーテイ派に対し、ミラノやトリノで、純労働者反対派が形成されたわけである。そのリーダーは、大学講師アルトゥーロ・ラブリオーラであった。彼らは議会活動を二義的とみなし、労働運動と非妥協的な反政府運動に重点を置いた。

この党内階級闘争に対するミヘルスの見地は、いまここでは、非常に冷静で、諦観に近いものである。プチブル出身のインテリは「子供」であるプロレタリアートを「巨人」へと教育する。しかし、成長したプロレタリアートは、インテリと戦い、それに取って代わっていく、と。

(3) ブルジョア指導層の危険性は、世紀の変わり目頃より顕著になった、といわれる。というのも、脱ブルジョア・インテリの社会主義支持の動機が、自己犠牲から個人的野心（「秘密の栄達という目的のため社会主義政党を利用する可能性」）へと変わってきたからである。ドイツのケース（つまり、ミヘルス自身）と比較すると、イタリアの脱ブルジョアは、出身階級との絆を完全に切断することはない。温和な国民性をミヘルスは暗示している。（いうまでもないが、モスカとパレトの対抗エリート論との符合が気づかれよう。）

ともあれ、ブルジョア指導層の危険性の自覚が高まったのには理由がある。今世紀初頭の所謂ジョリッティー体制である。それは、対社会主義、対労働運動への政策を強硬路線から柔軟路線へと転換させた。鉄血から砂糖、弾圧から福祉政策への転換は、PSIを、対決姿勢から「中立」的姿勢へと転換させた。

ラブリオーラが、指導層の社会主義インテリを労働者への裏切り、「籠絡」と非難するが、それは、まさに、こういう体制側と党指導層の変容によって可能となった。しかし、ミヘルスは、このラブリオーラの主張に対し、それでも、社会主義インテリの有害さは論証できないと反論する。ミヘルスの基本的な考えは一貫している。

「社会主義政党の歴史では、しばしば起こることだが、ここでも、ブ

ブルジョア出身の社会主義転向者が、社会主義的プロレタリアート自身よりもより<プロレタリアート>的だった」と、ある PSI 大会を振り返ってのべている。(S.690)

党の社会主義にとっての危険性とは、そのブルジョア分派にではなく、党の日和見主義的戦術にこそある、というのがミヘルスの確信であった。

(4) 中間層については、ラブリオーラによる、公務員労組批判を肯定的に紹介してゐる。

「国家官吏の肩にすぎるか、ないしは、その便宜を追い求めるような政党は、国家存続それ自体にとって何ら深刻な脅威を意味しない。国家は金銭的機能のみをもつことになる。」

(5) サンディカリズム。急速にサンディカリズムに傾斜し始めたラブリオーラ・グループとミヘルスとの思想的関係は興味深い。両者の関係から、ミヘルス自身の思想的独自性が浮かび上がってくるからである。

PSI ボローニャ大会後の、(イタリア初の)ゼネストで明らかになったことは、指導部の弱腰、指導力不足のみではない。プロレタリアート自身の主体的な政治能力の弱体さをもはっきりさせた、というのがミヘルスの判定である。

こういう状況の中で、イタリア・サンディカリズムが誕生する。ミヘルスは「新しい潮流」を、「最高に興味深い方向」と形容している。雑誌も数多く刊行された。<sup>(8)</sup>

ミヘルスは、イタリア社会主義再生を、反議会主義の純プロレタリア構成の運動によってのみ可能と考える。イタリアでも、議会フラクションは全く「改良主義」に染まっているからである。しかし、この純プロレタリア運動も、選挙では、アカデミカーを捜し求め、担ぎ出すという、パラドックスに陥っている。また、逆説的なのは、これのみではない。種々の雑多なプロレタリアートが参加し、統一性に欠けてもいる。従って、統一と団結を保持できるのは、資本主義世界との「理念的」対決による。サンディカリズムの存立理由は、このイデオロギー性、理念性に

ある。しかし、この定義の仕方は、ミヘルスの社会主義定義と共通の特徴であった。

「サンディカリズムの意義は、大規模な、階級と理念との一致にある。」  
「階級エゴイズム」のダイナミズム、大衆としての数的大量、唯一の労働力保持者としての生産上の不可欠性、こういう「最終法則」に従ったプロレタリアートにサンディカリズムは依拠する。しかし、歴史をうごかす原動力が「革命的で社会主義的」であるためには、それを大衆に「理解」させねばならぬ。インテリが必要となる。

以上、最初の本格的政党研究という意味で、ミヘルスの思想的発展のうえで興味深い部分を取りあげたが、ほとんど同じ問題意識で、SPDに取り組んだのが、同じアルヒーフに発表された論文「ドイツ社会民主党」(N.182)である。

この論文は、それまでのSPD研究を、科学的にそうまとめたものと考えられるし、おそらく、ミヘルス自身、社会主義「政治家ミヘルス」としての実践から、社会主義研究家のほうへと重心を移し始めたことを、自覚していたことの成果である。

この論文の成立の経緯については、すでに邦文の研究でも詳しく紹介されているので、ここでは、本稿の趣旨に沿う範囲でふれておきたい。<sup>(9)</sup>

ミヘルス自身ことわっているとおり、本論分は、ブランクによるSPDの社会的構成研究（これは、前年「アルヒーフ」に発表された）に触発されて書かれたのだが、それとともに、当時すでに知己となり、そのサークルに出入りしていた、マックス・ウェーバーによる、ブランク論文への評注が大きな刺激となったことも当然推定できる。

このウェーバー評注には、ミヘルスの社会主義政党分析で決定的となる、視点が提示されているからである。

ウェーバーは、政党の「職業政治家」を二つに分類する、

- ①「経済的に自ら自立した存在として、党のために生きるもの」と、
- ②「党の俸禄層」というグループで、それは、「その財政に直接依存し

て、生計を立てている党の職員層であれ、また間接的に党に依存して生計を立てている者（例えば編集者や新聞発行人等々）であれ、経済的事情から党に依存して生きることを余儀なくされている者」である。

そして、問題なのは、後者の有する特質、その「保守的利害」に引き付けられる特質である。それは、「党の戦術問題」にも規定的な影響力を発揮する。

この「党の俸禄層」問題は、「党のアカデミカー」問題とならんで、「党员層の社会的構成」の中で研究されねばならぬ、とウェーバーは主張した。

つぎに、このウェーバー評注で興味深いのは、「労働組合による党の支配」、つまり、SPDの「労働組合の党」への「脱皮」の予測である。

ウェーバーによると、SPDの「科学的」分析が悲観的なのは、資料が内部者にしか入手できないことであり、くわえて、第二の困難として、「価値判断、政治的願望」という主観的要素が作用するからである。

前者の障害は、党员のミヘルスには、比較的容易に克服できたし、後者の問題は、すべての政治学的研究につきまとうものであり、何も、政党分析に限られないであろう。従って、ミヘルスは有利な位置にいるといえなくも無い。<sup>(10)</sup>

次に興味を引くのは、ブランクとウェーバーの考えの異同である。

共通なのは、SPD社会的構成の特徴（支持者と、投票者）としての、「市民層の比重の増加」の指摘である。従って、SPD=「国民政党論」、この二つである。

相違は、その証明方法である。つまり、「党の支持者」と「党员層」の違いである。

相田氏のいうとおり、党官僚制の問題、党と労組の関係の問題が、ブランクには欠落している。この二つこそ、ミヘルスの『政党の社会学』での中心テーマではあった。

確かに、この論文で、『政党の社会学』のオリガーキー命題の「原型」

が見出された、という評価も可能であろう。(もっとも、マスとリーダーの心理や、エリート論的歴史観、民主主義の解釈が付け加わってくれば、であるが。これは、ミヘルス＝マルクス主義者、説からはでてこない。)

「SPD」論文(N.182)の構成は、「ブルジョア・プロレタリア」論(N.166)とほとんど同じである。選挙人と党員層の違い、という問題意識も共通である。

さて、ここでのミヘルスのSPD観は、科学的な事実認識としての抑制を伴いながら、基本的なところでは、決して悲観的なニュアンスを帯びてはいない。

「いかなる大衆運動も指導される必要がある。」続けて、「指導者は被指導者と同一の階級にその多くが、出自せねばならぬという、歴史法則はまったく存在しない。」この認識も、一貫している。従って、のちに触れるように、指導層の存在は、この時期のミヘルスにあっては、民主主義と矛盾するわけではない。のちに触れる、代表＝裏切りの可能性、という問題関心もまだうかがわれない。

もっとも、党が階級出世機構と化す事態を、「真に悲劇的な関係」と述べているし、「階級間の社会的交換」(ブルジョアがプロレタリアに、プロレタリアがブルジョアに)も逆説的表現である。指導部のプチブル化は、自動的に、政策のプチブル化を招くというのは、早計であり、じつは、ひとつのファクターでしかない。

要するに、SPDのかの巨大さは、厳密には何か。得票か。これについては、ブランクの誤りははっきりしている。SPDの力＝得票とした、その支持層としても、社会主義者ではない人がいるし、また、党員ではなくとも、社会主義的感情を持つものもいる。さらには、党員とは何者か、の問題もある。ここでは、党員証を持つ非社会主義者の数が、党員証のない社会主義者をはるかにうまわまることを念頭におくべきだと、ミヘルスは述べている。

社会主義者、党員、支持者といっても、簡単には、カテゴリー化できないし、また、確定することの意味はさほど無いかもしれない。

数字は所詮数字でしかないが、数字ぐらいしか、明示的な指標はない。ブランクの確認したように、SPDに投票するものは90年以降、「ブルジョア・デモクラシーの失敗、資本主義的集中の影響、SPDの全く大衆受けを狙った改良政策」によって、小ブル化したことは、ミヘルスも認める。が、それは、「党員層と同一ではない。」

SPDは、「その社会的構成において、圧倒的にプロレタリアの党員である。それについてはゆらぎはないし、……その必要もない」と自信をもって断言する。また、社会的構成の非プロレタリア性については、「理念」による「統合的なまとまり」がある限り、階級政党だとされる。

ともあれ、総括すると、党の出世機構化論、SPDの小ブル化論の契機は以下のようなだろう。

- 1) 小ブルの入党（職人、親分、小商人）、
- 2) 出世機構、脱プロレタリア、党官僚機構（軍隊と教会に類似）、
- 3) 指導層の小ブル化、
- 4) 党外での小ブルの力。
- 5) 議員フラクション。

かくして、結論としては、「SPDには小ブル化の契機——決して無視できないし、重要ですらある——が存在するとしても、党員層とその指導部においてすら、プロレタリアの性格が強いということは疑問の余地が無い。」SPDの「力の源泉」も、ドイツのプロレタリアートである。先に述べた小ブル化の問題は、政策にどう影響するか。SPD内部の階級矛盾を、社会主義理念で克服できるか否か、今後のテーマとなろう。

最後に、このSPD論文には、SPDの女性党員の項目もあり、これについて、ミヘルスが最初のドイツ・フェミニストという評価もなされたが、いままでの本研究からみて、われわれには驚くに値しないであろう。

#### (4) マンハイムとローマの大会

06年の秋、SPD（9月、マンハイム大会）とPCI（10月、ローマ）の両大会の結果は、ミヘルスを完全に打ちのめした。マンハイムでは、労組の穏健派へと党が屈服し、また、新しい多数派（ベーベル、レギエン）がカウツキー派を孤立させることになった。ローマでも、フェッリ、ボノーミら改良派が新しい多数派執行部をつくり、ラブリオーラ・グループは、党離脱へと歩を進めた。

この新しい展開をどう評価するかで、ミヘルスの立場も一層、孤立を深めていったのが、06年の後半であった。

ミヘルスは、その自伝的文書で、マールブルクにおける自分の青年時代を振り返っているが、06年頃に、「終末論的な気分」ととらわれて、その青年たちは、ウェーバーとゾンバルトに魅せられた、と書いている<sup>(11)</sup>。

ミヘルスの基本的なテーゼは、ウェーバーと同じと考えられる。「党の階級的な性格に関する問題」では、党組織の外部の支持層以上に重要なものは、「おそらく党組織の内部に」存在する「プロレタリア的」分子の影響力であるとする視点で共通している。

安によると、SPD内では、反戦、反軍国主義の闘争は、主にリーブックネヒトとローザによってなされていたが、ベーベルがそれを掣肘するという構図で展開していた。マンハイム大会でベーベルは、反軍国主義運動に反対する態度を固める。「党執行部が急進的左派に決定的に背を向け、改良主義的組合総委員会に屈服し、党内反革命が開始された」大会であった<sup>(12)</sup>。

ベーベルのこの態度は、政治的大衆ストライキ問題に対する保守的な姿勢への豹変に対応している、労組の主導権の確立を立証するものであった。

「1906年のマンハイム党大会でのストライキ論争の決着と社会主義運動における党に対する組合の主導権の確立」が大きな転機をなした<sup>(13)</sup>。

06年1月ハンブルクでの、ドイツ史上初の政治的大衆ストライキは、SPD 執行部に決断を迫った。しかし、それは、下からのストライキ要求に反対の姿勢を強くしていった。帝政国家との対決による党組織の破綻を恐れたからである。組合の指導部も同様であった。かくて、06年2月、組合総委員会と党執行部との秘密会議で、反大衆ストライキの協定が結ばれたことは既に述べた。

これが、党と組合の関係の問題を公然化した。06年大会では、政治的大衆ストライキ問題、および党と組合の関係問題が主要議題となる。

ここで、執行部は、前回イエーナ大会でのように、左派と連合するのではなく、左派に冷淡な姿勢へと転換した。組織改革（投票獲得を目的とする組織、中央集権的支部組織の確立、党執行部を頂点とする党官僚組織の確立、その結果としての党執行部権力の強化）もなされた。

この大会でローザはパンフレット「大衆ストライキ、党ならびに労働組合」を配布し、そこで、自然発生的な大衆ストの意義を提唱した。彼女はこのパンフレットで、「闘争を生み出すのは、あくまでも組織である」とする組合指導部の主張を、組織の過大評価、「未組織のプロレタリアート大衆と彼らの政治能力に対する過小評価」であると批判した。ここには、「組織は権力」であるとする、改良主義派と組合のリーダーへの反感があるとはいえ、見方をかえれば、ローザら左派は、「改良主義者の組織観と組織活動に機械的に反発し組織より行動を要求して、組織の社会主義運動としての重要性を認識しようとはしなかった」と安は批判している。

さて、SPD マンハイム大会については、青年ミヘルスの思想的発展との関係で、注目すべき事項がある。ほかならぬ、マックス・ウェーバーがこの大会を参観したのである。そしてその印象を、SPD 恐るるに足らず、とミヘルスに手紙を書いた。大会には、「まったく極端なほど小ブルジョア的な習性や、多くの満ち足りた宿屋の主人の顔や、左への途が塞がれてしまったが、あるいはそのように思われている時、右へ

の途を進む結論をくだす決意も無い無気力がみられました。したがって、この紳士たちをもはや誰も恐れることはありません」と。ウェーバーはこのようなSPD観を、「数年前」から抱いていたようである<sup>(14)</sup>。

さて、ミヘルス自身の大会総括は、翌07年の“Le Mouvement Socialiste”誌に発表された<sup>(15)</sup>。

ミヘルスは、この大会を、ちょうど100年前の対ナポレオン、「イエナ戦争敗北よりも無残な大会であった」と書き出している。「戦いが始まる前にSPDのイエナは、自らの剣——党の原則とその存在理由——を放棄し、敵に降伏した。つまり、改良主義、中央集権主義的労組の総委員会という敵に、である。」

ここで、フランス・サンディカリストのラガルデルによる大会評との違いをミヘルスはのべている。ラガルデルにとっては、このような結果は、「運動の将来にとってはより好ましいものであった。SPDのわけの分からぬエセ革命主義へ服するよりは」と主張していた。この「マンハイム」論文において、ミヘルスの党と労組についての基本的考えに以前と変わりはない

ラガルデルとは反対に、ミヘルスによれば、SPDには、「欠陥と誤謬」が見出されるが、まだ、その陣営内には、社会主義の「感情と思想」を保持し、「無気力な大衆」を活気付ける「革命的」な活動の要素を多く有している。このことは「時がたてばわかるだろう」との言葉、ミヘルスの失望気味の期待なのだろうか。

党に対する希望的観測に比べて、労組の見方は相変わらず手厳しい。ドイツの労組は、「根本的に独裁主義的で、中央集権主義的な戦術」と思想に基づいている。すでに、「再生の能力」すら失っている。幹部は一切の「革命戦争」に反対する。こういう、労組に対する、党優位の要望はいつものことだが、今回のマンハイム大会は、その党自身の「墮落ぶり」を暴露することになった、というのがミヘルスの総括である。

ゼネスト論争にみられた、「行動に対する恐れ、改良主義への傾斜、

革命的要素に対する激怒」が、それを説明する。逆に党内の「極右」勢力に対しては寛大である。SPDは、この大会で、「労組主義的現実主義」のくびきに服し、「革命主義の残りかす」をすっかり捨て去った。

労組への批判的姿勢は相変わらずである。「周知のように、ドイツの労組運動は強固に中央集権化され、ほとんど社会主義的ではない。」軍国主義との闘争は、「政治的」との理由ではなから忌避される。資本主義体制の枠内で、日常的な改良運動に没頭する。ゼネストは「組織を破壊し、日常的メカニズムを危うくする戦術」とされる。

労組とSPD幹部の秘密会談で、「ベーベルは、党の指導部はゼネスト勃発回避のためにはあらゆることをする」と約束した。ベーベルは、このゆれ戻しの頭目にされ、「ドレスデンの反改良主義者ベーベル、イエナのゼネスト支持者ベーベルは、生粋の修正主義者ベーベルに席を譲った。」彼に従うことに慣れ親しんだ党大衆は、以前とまったく同様に、変節したベーベルを「熱狂的に」支持した。

このベーベルに対して、対外的にSPDを代表する「ラディカルで科学的な」グループ（カウツキー、ローザ、メーリング、クララ・ツェトキン、レーデブーア）は、対外的イメージとは反対に、極少数派を形成しているに過ぎない。ともあれ、50票対332票で、ベーベルの修正主義派が勝利した。「ドイツの社会主義のラディカリズムは破産した。」

第二のテーマ、戦争と反戦運動について、フランスやイタリアの社会主義政党ではかなり議論されているのに、この大会では、ほとんど話題にもならない。

SPD大衆の心理分析での説明がここでは、際立つ。戦争と衝突に対する、そもそもの恐怖と、そのために、リーダーを失った場合の、大衆の周章狼狽ぶりを、ミヘルスは痛烈に指摘する。さらに、プロイセン国家に対する大衆の愛国主義は、社会主義者としての義務すら忘れさせる。従って、SPDの国際主義は所詮はお題目に過ぎない、と。そして、他国の社会主義政党に対する虚栄と誇大妄想は、ゆがめられた「愛国主義」

である。

「彼らは、皇帝のお情けがなければ、何もしえないような国家に生活しているから、彼らは、自分のためにこしらえた美しい貝殻で満足し、自分の組織の高みから他の社会主義者を——彼らのことを多く理解せねばならないのに——不適切にも、冷笑的、侮蔑的態度でながめている。」

最後に、第三の、「組織のための組織」こそ、もっとも重要な党組織分析の中心に位置するテーマであろう。

「巨大な政党」の宿命として、「組織は必然的に官僚制を意味する。」この悲観的のトーンは、『政党の社会学』にまで引き継がれる。「党生活を統制し、党費を集め、情宣をするために、秩序と規律が必要となる。しかし、追求する目的の達成のための手段である組織が、だんだん、その当事者に気づかれること無しに、目的それ自体になってしまった。」

しかし、そのような巨大になった組織は、「国家の中では、弱い組織」である。その「無力さ」は、日々観察しうる、とミヘルスは述べる。（この国家内国家、組織内組織という視点は、ミヘルスの組織論ではさほど重要な位置を占めない。）

SPDの組織は、「大きくなればなるほど、それは、自らの装置のうちにプロレタリアートの官僚制を取り入れ、それをプチブルに変え、小さな地位に機能を授ければ、それだけ一層、それを弱体化し、敵の権力へとすり寄せ、すぐさま、革命的感情を萎えさせ、行動を麻痺させ、遂に、社会主義革命は消滅する。」

これは、組織自身の有する、官僚制化と保守化の一般的表現だが、その単純な理由をこう説明する。

「即ち、SPDは絶えず、国家が消滅させようとすればそうできる組織、それを失うのではないかという悪夢、長年にわたる熱心な知的な苦労の世界である組織、そして、多岐にわたる、優れた<被用者>の参謀本部——これは党によって生きているのであり、党なくして生きていけない——の相対的な安楽を失うのではないかという悪夢に悩ませられてい

るからである。国家による組織の解散の恐怖」がすべての決議を支配している。

組織が政策を規定する。反軍国主義とゼネストを永久に封じ込めたのも、この「組織のための組織」という「物神崇拜」に他ならない。それへ向けて、社会主義自身が捧げられ、隔離される。

こういう悲観的な事実認識に救いはないように見える。付け足しのような、最後のメッセージが次ぎのように締めくくるとしても、それは変わらない。ミヘルスは、党内にまだ、「多くのミリタン」が生き残っており、彼らの覚醒にこそ、SPDの未来がかかっている、という。

約4ヵ月後の10月、ローマでPSI大会が開かれる。ドイツの「ライン新聞」(12月15日)に簡単な報告が載る。(N.177)

「労働者階級に対する好意的な政策」をとるジョリッティ体制下、PSIも「すばらしい経験」をしていた。「本物の改良主義であるトゥラーティ派と党内右派の政策」が有力となりそうだ。ミヘルスは、これ自体はそう悪いわけではないと、楽観的に評価している。「権利をめぐる労働者階級の戦いは、直線コースを進むわけではない」からである、と。「最終目標である解放」への途は険しい。

SPDに比べて、PSIへのミヘルスの評価が多少楽観的なものには、いくつかの理由がある。<sup>(16)</sup>

- 1) 選挙制度の違い。一応、普選の行われているドイツとは違い、イタリアでは、制限選挙のため、「議会主義」の幻想に染まっていない。
- 2) PSIに占める農民とインテリの重要性。既に触れたように、これは、エゴイズムにどっぷり漬かったドイツの「労働貴族」に比べると、道徳的と知的の両面で、PSIを際立たせている。
- 3) 最後に、官僚制への免疫性とでもいえよう。「弁護士の参謀本部によって指導された労働者の党の不都合さというものも、良い面を

持つ。というのも、この体制は、堅固な官僚制——これはミイラのようになり、さらに悪いことには、それ自体自己目的になる本姓を有す——のもつ、由々しき不都合さを免れているからであり、さらには、そのため、PSI はメンバーの柔軟性と人格的で新鮮な精力を保持している。のみならず、イタリアのシステムは、日常活動がどんな物的利益をももたらさないのに、強制もなしに自主的な義務感と、大義への愛によって、強く促されているという長所<sup>(17)</sup>を有する。」PSI への共感<sup>(17)</sup>は、しかし、フェッラーリスによれば、「無批判的」でもあった。

#### (5) バルトとの社会主義論争

同じ秋、今度はフランスの有名なソレリアン、バルトとの間に、“Le Mouvement Socialiste” 誌上で、社会主義とサンディカリズムをめぐって論争が展開されたが、そこでミヘルス自身の思想も一層深められていったといえる。

バルトは、10月、自分の雑誌にミヘルスの「イタリア社会主義運動におけるブルジョアジーとプロレタリアート」論文への書評を書いたが、それは、非常に「冷酷」でさえあり、ミヘルスの社会主義観の本質にも迫るものであった。

しかし、バルトとの論戦は、党と労組との関係の考察が、組織と寡頭制のミヘルス命題へとどう発展していくかを暗示していて、非常に興味深いものである。同時に、「ミヘルスの政治的文化的展望と革命的サンディカリズムの思想を分かつ距離」<sup>(18)</sup>のほどをも浮き彫りにした。

バルトによると、ミヘルス論文のテーマは、イタリアの社会主義運動がどの程度「労働運動」であるか、というものであった。バルトは、「内部組織よりも、選挙と議会の視点」からなされた、ミヘルスの「真面目で丹念な分析」を、一定評価しつつ、こう PSI の特徴をまとめる。

1) PSI 支持者の大衆は労働者だが、党幹部はブルジョア出身者が多

い。

- 2) 従って、PSIほど、インテリの多い党は他に無く、指導部は労働者よりも、彼らインテリの手にある。
- 3) 本来サンディカリズムは反インテリの運動であるにもかかわらず、イタリアのサンディカリズムはインテリ自身の産物である。
- 4) イタリアのインテリには、社会主義支持者が多いこと。

このミヘルスによる、イタリア社会主義の特徴付けに対し、バルトはそれらを社会主義一般へと普遍化する。つまり、どの社会主義にも共通の特徴ではないか、と。バルトには、SPDですら、ことさら労働者的であるようには「見えない。」

次いで、労働者的政策と代表について、決定的な問いを投げかける。その政策が労働者的なのは代表が労働者的だからではない。ミヘルスのように、議会への代表がインテリ出身でも労働者的（社会主義的）政策が可能とする見方に対して、バルトは、「労働者の利益が代表をもつことは必要か、それどころか、可能かどうか」を問え、と反論する。そして、フランス・サンディカリズムの「直接行動」論の立場に立って、労働者の利益はそもそも、代表しえないのだ、と主張する。「労働者階級は代表されるものとしてではなく、自立する大衆として行動せねばならぬ、そして、代表とは必然的に、裏切り、偏倚、ブルジョア化を意味する。」この代表否定はインテリ否定につながる。選挙と議会を中心とする社会主義は、必然的に「ブルジョア・インテリの優勢」をもたらす。労働者にとって、インテリは生産者よりも、商人に近い。議会は取引と妥協の世界だからである。「議会ないし、ブルジョアの世界と労働者の世界との間には深淵が存在する。」労働者にとって社会主義の中心にあるのは、「階級闘争の理念」以外の何物でもない。議会と代表は「裏切り」以外の何物でもない。

こう強調するサンディカリストのバルトも、ミヘルスが「議会主義の危険性」を認識していることは認めている。しかし、「ミヘルスのサン

ディカリズムは依然として、余りにイデオロギー的ではないか」と、批判を進めていく。これはミヘルスの社会主義観の特徴であるし、ミヘルス自身が公言しているところである。これには当惑すると、バルトは率直に述べる。ミヘルスにあっては、社会主義とプロレタリアートとの間に本質的な関係が存在しないのではないか。そうとすれば、イデオロギー的努力としての、ミヘルス社会主義は「経済的より教育的」性格を強くもち、よって階級の違いに無頓着な、マルクス以前のユートピアンではないか、と。

ミヘルスには、現代の労働運動に見られる経済的（階級的）エゴイズムが気に入らないのだ、とバルトは述べる。ミヘルスにとって、インテリの理想主義が大事なのだ、と。これに対して、バルトは労働運動無しに社会主義運動も無い、との基本的考えに立つ。逆に、バルトによれば、ミヘルスにとって、労働者階級のいない社会主義というのも可能ということになる。よって、イタリアの社会主義者を、「依頼者の無い弁護士、患者の来ない医者、ビリアードにはげむ学生」と揶揄したマルクスは不当、とミヘルスには見えるのである。

要するに、ミヘルスはイタリアを買いかぶりすぎる、とバルトは皮肉る。イタリア人の軽率、軽信、軽薄さも、ミヘルスには、「相互寛容、親切、近づきやすさ」と映るのである。

バルトは、そもそも政党にこそ問題があると主張する。「政党ではインテリが労働者を支配するのが宿命的なことではないか。……あらゆる政党は、政治の分野で労働者を指導するインテリ幹部よりなる。」サンディカリイストなら、政治と政党から手を引くべきであろう、と。

このようなバルトによるミヘルス批判は、社会主義一般に関する普遍的な問題を鋭く提起していた。これに対して、ミヘルスは翌年、同じ「社会主義運動」誌に反論を書いた。<sup>(19)</sup>

ミヘルスはまず、バルトによる、「センチメンタリスト」、「階級闘争に無関心なプロレタリア運動の敵」呼ばわりに怒る。

「歴史的経験としては社会主義はプロレタリアート無しにはやっていけない。」資本主義体制の経済的必然性による。ただし、このプロレタリアの階級闘争には、「社会教育」が必要であることを、是非とも銘記させたかった、と述べている。これは、実際の SPD 政治に真っ向から対立する、とミヘルスは主張する。SPD 政治は、党員たちに、自分の社会的地位の安泰につとめるよう、偽装せよと説く。これは、「人間にとって最も高貴で、階級闘争にもっとも必要な感情、情熱と理想主義」を抹殺する。

階級エゴイズム理解についてもバルトとミヘルスは異なる。バルトにとってそれは、正義と名誉の感情を意味する。ミヘルスにとっては、「階級エゴイズムだけでは革命的目標を達成できない。」ここでミヘルスは、サンディカリズムの再定義を対置する。

多様な労働者、そして農民をまとめるのは、エゴイズムではない。「ブルジョア経済とブルジョア・イデオロギー」との対決、とする。サンディアカリズムは、「伝統的社会主義とは別の、純粋にプロレタリアの運動」（ここで、「純粋」を実体として理解すると、先の多様性と矛盾してくる）であり、「最終目標」を明確に表明する、とされる。よって、ミヘルスのサンディカリズムは、トレードユニオン主義とも、ドイツの中立主義とも異なる。「理念と階級との偉大な統合」である。つまり、バルトが重視する階級的エゴイズムのみが、唯一の契機なのではない。こうして、ミヘルスのサンディアカリズムは、この意味で、（階級的）プロレタリア的であるだけでなく、「革命的社會主義」なのである。バルトは、自分の説を誤解していると、繰り返してから、社会主義の必須の契機としての「倫理的要因」をミヘルスは力説する。粗野な「階級的エゴイズム」と社会主義を分かち、この倫理的要因とは、「徹底的変革の道徳的必然性」のこととされる。この契機は、いかなる労働運動にも存在するというわけではない。「社会教育」も必要である。クルップ軍需工場の労働者を、賃金闘争を越えて、反軍国主義や、国際的連帯へ

と自覚させるのは、この倫理観である。「経済的契機は道徳的教育の協力無しには、無力である。」それが無ければ、「プロレタリアートの使命は実現できない。」

第二のテーマ、党と代表についての反論こそ、本論で最も重要な部分である。

バルトの直接行動論は、「労働者階級が独立した大衆として、従って、代表されないものとして行動すべきであるとする理想」である。というのも、「代表制は、必然的に、裏切り、逸脱、ブルジョア化を意味するから」というわけである。「よろしい」とミヘルスは問い返す、「ところで、何故にバルトは、恣意的に、自分の理論を党にのみ適用するのか。」つまり、労組も「同じ危険性」に陥るのではないか、何故なら、「同じ根本原理、代表制」を有しているではないか、と。

「ストライキという決定的瞬間に自分自身を代表させるのは、なるほど大衆ではない。どのようなかたちであれ、＜代表＞のいない労組は未だつくられたことはない。バルトは、自分のテーゼを深く掘り下げなかった、彼は、党がブルジョア化を引き起こすという替わりに、組織がブルジョア化を引き起こすと言うべきであった。しかし、組織原理は党と労組を平等に悩ます。解決すべき問題は……何よりも、すべての組織、すべての代表に内在する欠陥に対応する方策を見つけ出すということだ。応答はサンディカリズムと呼ばれる。しかし、それ自身も、代表制の原理に基づいた存在（労組の職員）を用いるので、それもまた、自らのうちに残酷な二律背反を宿すことになる。……それが解決すべき問題であり、いまだ解決されていない。」

先に述べたように、バルトによると、ミヘルスは、社会主義の本質規定の問題について、社会主義は「プロレタリアートと理念との統合」と強調する。資本主義とプロレタリアートが社会主義を生んだというのは、不正確である。イデオロギーとしての社会主義は、プロレタリアートよりも以前に存在していた。逆に、理念のみが、社会主義を生んだ、とす

るのも誤りだろう、と。バルトに対して、ミヘルスが強調したいのは、理念としての社会主義、イデオロギーとしての社会主義の面であることは、いうまでもない。

そのような、社会主義の理念が欠落すると、いくら、資本主義が発展しても、「自動的に」社会主義運動は生まれはしない。合衆国がその例である。

社会主義の理念的側面の重視は、「労働運動におけるインテリの役割」への注目につながる。「斥候」としてのインテリが無くして、労働運動はありえない。「非妥協的で、革命的」なのは、「労働大衆」よりも、「ブルジョア出身のインテリ」であることは、歴史の教えるところである、とはミヘルスの持説である。

この点をバルトは全く評価しない。党と労働者の関係について、フランスとドイツ、イタリアの発展の違いをミヘルスは指摘する。フランスでは、社会党と労組がそれぞれ独立に発展してきたのに対し、独伊両国では、密接な関係を保持してきた。労働運動は党によって生み出されてきたし、党はプロレタリアートの家庭教師の役を果たしてきた。要するに、「労組の目的は国ごとに様々である。労働者の心理は、政党に見合って、国ごとの社会主義史の帰結である。」

議会と議会主義への幻想についても違いがある。フランスでは、「議会への幻滅という長い試練にうんざりしているので、民主主義への幻想を失ってしまった」のに、対し、独伊両国では、プロレタリアートは、「ブルジョア的代表システム」の経験が浅く、幻滅するところまで行っていない。民主主義の「制度化」自体が、未熟で、だからこそ、願望的であり続けている。

サンディカリズムについてもフランスと同じ形をとる必然性はない。独伊では党内での派閥を維持することが「絶対必要」である。唯一「革命的源泉」をなすのが、このグループだからである。彼らが党を出ることは、「大変な誤り」であり、「自殺行為」に等しい。

ここで確認せねばならないことは、ラプリーラ・グループが、07年の7月には党から分離したことであり、それはミヘルスの期待を大きくうらぎることになった、ということである。

この社会主義論争論文は、ミヘルスの思想と学問の発展過程で大きな転換点をなすように思える。ミッツマンによると、この論文において、ミヘルスは自分の「サンディカリストとしての確信を放棄し」、SPD批判を労組にまで拡大し、「政治的分析から、普遍的な社会法則と傾向性を探求する社会学へと移行する基礎」を確保したと評価し、ピーサムも、ここに、「ミヘルスがSPD指導部の普遍的ブルジョア化という彼の究極テーマに非常に近いところにたどり着いた」、その重要な契機を示している<sup>(20)</sup>とみている。

しかしこれまでのミヘルスの思想的発展をたどってみれば、二人の評価の前提となっている、政党の墮落という過程を、「サンディカリズム系労組」が免れているという信念をミヘルスが抱いていたという想定こそが、誤りであることが分かるだろう。むしろ逆で、(ドイツの)労組の中にこそ、官僚制と権威主義と保守化の芽を見いだしたのである。ミヘルスの確信によると、労働運動が本来有する解放的使命は、理論と実践との統一である党の指導のもとに、初めて達成できるのである。ミヘルスは、労組に対するラガルデルの幻想を共有はしていない。

さてこのミヘルスの「社会主義論争」論文は、『政党の社会学』形成の観点からも重要な意味を持つ。

07年から、『政党の社会学』の11年頃までのミヘルスの展開を、フェッターリスは、「パラダイムの変換」として、つぎのように述べる。「このパラダイム変換は、私のみるところ、当初は党でのみ作用すると見られた組織と代表制の原理から演繹された結論を労組にまで拡大するところに起源を有するのではない。それは余りに単純すぎる。この違いの素は他にある。

「政党の分析的歴史の理論」(「プロレタリアートとブルジョアジー」

論文、序文)を築こうとするミヘルスから、「政党の内部構造の理論」(『政党の社会学』第一版、序文)を構築するミヘルスへの変身、政治的実践と政治科学を弁証法的に自ら生きるミヘルスから、政治的ミリタンの過去に政治社会学を対置するミヘルスへの変身、結局は進歩主義的歴史哲学へと訴えるミヘルスから、すべての民主的組織の〈後退現象〉を確認した専門科学者としてのミヘルスへの変身、である。」

要するに、急進的社会主义政治家から政治社会学者への変身ということになるのか。ただ、次のことだけは、確かなようである。

07年を境に、なるほど、社会主义へのコミットから身を離し始めたものの、政治現象への関心は失わなかったということ、イタリア・ナショナリズムとイタリア・ファシズムには、多少とも積極的にコミットした、という事実は否定できないだろう。

従って、先取的に言えば、後年、イタリア政治への再度のコミットが起り、当然それに伴って「パラダイムの変換」が、生じることになるといえようか。

バルトとの論争の問題に戻ると、この論争の時点でのミヘルスが、バルトの「代表=裏切り」説を「大胆」と形容したのは偶然ではない、とフェッラーリスは主張する。<sup>(21)</sup>

というのも、バルトとは反対に、当時のミヘルスは、代表性の原理を承認していたし、大衆運動にとって組織が必要であることを認め、政治的、文化的リーダーシップの重要性を認めていたからである。従って、労組を万能薬、特効薬とみなすサンディカリストにミヘルスは一貫して、与してはいないということは確かである。

さらに、以上から、革命的サンディカリズムとミヘルスの大衆観の相違が分かる。前者は労働者自身の能力への信頼を有するとすれば、ミヘルスは、大衆には社会主义的な指導が必要不可欠とかがえている、ということである。<sup>(22)</sup>

(6) 愛国主義, フェミニズム

当時のミヘルスの社会主義観を示すものには、以上のような闘争と運動、そして組織との密接な関わりのなかで書かれたもの以外にも、存在することは、今までと同様である。

この年、9月2-3日、「ミラノ人文協会」が主催した、「失業との戦いのための国際会議」(第一回)が開催された。その名前に相応しく、世界各地から36名の参加者があり、ミヘルス自身も参加し、ドイツのケース(「ドイツの労組と失業との戦い」(N.174))を報告した。この重要問題に対して、「实际的」な対応を意図したという意味でこの会議は優れているとミヘルスは評価している。といっても、「キリスト教的慈愛と慈善」では解決できないとする点では全員が一致していたという。会議では、失業の原因、予防、対策という三つのテーマで議論された。

① 原因に関する議論では、「人口と食料の不均衡」説、資本主義体制につきものとしての失業、というグラツィアーニの説を紹介している。「現行の経済システム」に最大の原因があるという認識を共有しつつも、「革命」を唯一の解決手段とするのではない。会議の目的は、「失業を消滅させるのではない、それを和らげる方策を探求すること」に限定されていたからである。このような限定された目的での決議作成にミヘルス自身も加わった。といっても、彼は、失業対策に労働者と資本家の協力が必要とする見解には断固反対したと書いている。

このように、实际的行動と原理的認識との乖離、齟齬はミヘルスに限らず、社会主義に特徴的なものであったといえる。そのため、このような会議は不毛であるとの、アンジェリカ・バラバノフの言葉をミヘルスは同調的に注記している。政府、資本家、ブルジョア学者が失業を憎むのは、そこに「社会革命の芽」を不安げに見出しているからである、とのバラバノフの意見は「もっともなことである」と。

エミリオ・コッサの労使協調による解決策にミヘルスは反対の論陣を

は、そこで後にミヘルスの窮乏化論研究の素になる、「失業問題は資本主義体制そのものの死活問題である」という観点からの議論を展開した。資本には「自由な労働力」以外に、産業予備軍を必要とする。「科学は労働者とともに進むことができるが、資本主義はそうではない。」よって、コッサの見解は「甘い」と。ここにも、歴史と進歩と科学への素朴な信頼が吐露されている。

② 会議でもめた第二のテーマは、国家の役割についてであった。これについても、ミヘルス自身が発言する。失業との戦いは、国家やコムーネではなく、労働者自身の義務であるとの、原則的立場を固持しつつ、さらに、国家を階級間の仲裁者とする幻想をも否定する。しかし、ここでのミヘルスの立場は、会議参加者の多くの社会主義者の支持を得ることはできなかった、という。彼らは、労災や自然災害による失業を念頭において、国家介入を有益で必要と考えていた。ミヘルスによると、これは失業の階級性を無視している。同じく、議論を混乱させたのは、国家の概念が曖昧なことである。さらに、反失業の戦いが、国や地域や業種によって異なることも、議論を複雑にした。(たとえば、ドイツでは工業の、イタリアでは農業の失業が重要である。)ともあれ、この会議の成果としては、せいぜい、失業との戦いの中心的担い手が労働者階級自身であり、慈善ではないことを確認したことであろう。ちなみに、ミヘルスのトリノ移住に手を貸した、アキレ・ロリアの失業問題に関する意見として、相互「扶助」が、問題解決には「全く不十分」であるとする見解を紹介し、賛成を表明していた。

フェミニズム関係では、「性愛に関する概観——ドイツとイタリアの性愛のかたち、パリの愛情生活から」(N.175)を紹介しておこう。ドイツの女性雑誌“Mutterschutz”(母性保護)に書かれたものだが、それは、この雑誌の方針に真っ向から挑戦するよう見える。というのも、ここでは、パリの娼婦に対する、古代アテネの遊女に似た賛美を呈して

いるからである。また、経済的と性的の被搾取者としてプロレタリア売春婦を論じてきた見方とは、異なる視点を提供している。とはいえ、決して彼女らを理想視しているわけではない。「すべての売春は非難すべきで」あり、「経済的秩序の変革」、即ち社会主義革命で消滅させるべき「過去の遺物」だからであると最後に断わっている。ただ、この小文からミヘルスのトータルな人間把握が伺える。つまり、「自由な遊女」は、性的存在を肯定するだけではなく、精神的、文化的そしてヒューマニズム（「性を越えた友愛の欲求」）としての存在を見出させる、とミヘルスは語る。女性は、母性を有するのみではないのである。このようなフランスの売春婦賛美を偽善とする批判に対してミヘルスは、パリの娼婦にこそ「人間の尊厳の残滓」をみいだそうとする。

『アルヒーフ』には社会主義関係の書評を集めた論考（N.183）も発表された。ミヘルスの社会主義観を把握するうえで興味深い部分を紹介しておこう。

この書評集の特徴としては、アナーキズムとマルクス主義との関係を焦点のひとつとしてあげることができよう。イタリアでアナルコ・サンディカリズムと呼ばれるほど、両者の繋がりは強いことに鑑み、当時のミヘルスの思想的格闘を反映しているといえる。

先ず、社会主義＝「科学」の捉え方にふれておこう。「社会主義とは、普遍的な思想方向としても歴史哲学としても、また、国民経済学の試みとしても、そして最後に、といっても決して軽いものではないが、世界の進行を生産者、消費者としてその両肩に担う国際的な一階級の大衆運動としても、ひとつの科学なのだ。他の科学と同様であり、それ以上により複雑で、分岐し分化し、あらゆる領域の我々の知識を覆う科学である。それは、莫大な数の理論と定理で一杯だ。それはひとつの歴史を有し、その若さにも拘らず、歴史の現象形態の大規模、多様性、複雑さにも拘らず、安んじて、いわゆる第三身分の見方に立っている。最後にそ

れは、ひとつの文献をもち、それは、あらゆる言語で流布し、量的に、また部分的には質的にも、とにかく、歴史的、心理的関心ではそれに肩を並べるものは容易にはみいだせない。」

ここで分かることだが、「科学」が、いわゆる厳密な科学というより、歴史哲学と経済学、そして運動をも含む総合的な理論を意味している。またプロレタリアの立場にたった歴史観でもある。他面、実践とのかかわりでは、「目的論的」契機を含むことが社会主義の必須条件と考えている。重要なことは、「目標を達成すること、しかも早急にかつ道義的なやりかたで」、とマルクスのフォイエルバッハ・テーゼを思わせる言葉を書いている。

「アナーキズムの社会民主主義に対する関係は、自由の強制に対する関係に等しい」とするニーベンホイスの等式をミヘルスは、相対的に正しいと認めている。「なぜなら、社会民主主義の制御可能な公式の指導部と、組織の思想に対していつも冷淡だとは限らないアナキストの党の指導部との間に、どこでも妥当する本質的相違を指摘することはできないからである。」アナーキズムも社会民主主義も、こと組織構造では同じ問題を含んでいるということである。

イタリア社会主義の特徴についても、一瞥しておこう。15年前より「社会主義思想の熱狂的支持者」となったデ・アミーチスについては、国民経済学の知識は無いが、彼ほど、「イタリア社会の深い研究」をした者はいない、と好意的に評価をしている。「その文化的価値は、なによりも、それがイタリア社会主義の暖かさ、犠牲的精神、非常に高い道義的眞面目さを反映している点にある。スケッチはほとんど例外無く知識人の世界を扱っているが、これは又、イタリア社会主義の特徴でもある。」

イタリア社会主義史でバクーニンは忘れてはならない存在である。ミヘルスによると、彼ほどイタリアの情勢に精通した者はいない。そして、二階級体制というマルクスの「壮大な単純化」にバクーニンは、イタリ

アの情勢には確かに該当する五階級論を対置する。彼はそれを、なるほど、「純粹に経済的な目標ではなく、部分的にはイデオロギー的目標に即しても分類した。」

1. 聖職者, 2. 大ブルジョアジーと貴族,
3. 中小ブルジョアジー, 4. 工業プロレタリアート,
5. コンタディーニ (小作人と農業労働者), である。

「全体としてバクーニンは全くマルクスの基盤にたっている。」ただ、歴史における人間の自覚的な意志の力にマルクスより大きな役割を与えているところが違う。

これらの語句から、ミヘルス社会主義の形成に作用した、様々な契機が分かるというものである。

06年頃のミヘルスの愛国主義観は、「愛国主義と倫理——批判的スケッチ」(N.181)と題された小冊子から伺える。これは、05年11月と翌06年1月になされた講演がもとになっている。興味深いことに、この論文は「カント研究者にして人間的な、カール・フォアレンダー」に献呈されている。(ミヘルスと新カント派との関係は、意外に思われようが、興味あるテーマであろう。)

ここでのミヘルスの立場は、基本的にゾンバルトの「文化的愛国主義」に依拠している。

ドイツ語の「人倫」Sittlichkeit 概念を多用する者の偽善がまず弾劾される。彼らは、社会的矛盾を矮小化するだけではない。「歴史的に生成した不正を永久化、永久視する。」センチメンタリズムと宿命論で、そして、「伝統にとらわれた迷信、偏見、先入見」で人民をたぶらかす。このブルジョア・イデオロギーに対して、ミヘルスは唯一倫理に値するものとして、「人々を学問的認識に基づいた決断へと教育すること」を主張する。(フェッラーリスが、ミヘルスにおける社会教育という使命観を指摘したのもこの点に関わる。)

この倫理観はどちらかといえば、ヘーゲル的である。プロレタリア階級の解放、人類の社会経済的救済は、ミヘルスにおいて、倫理的教育と結びついている。「学問的認識」は、ミヘルスの学問的営為とインテリのアイデンティティーを保証する。

「倫理とは真理である」命題は完全にヘーゲル的であるが、その真理とは、「批判的思想」によってもたらされるとする時、ラディカルになる。批判的とは、先の伝統的イデオロギーを「打破」することに他ならない。「慣れ親しんだ古い概念、価値観、思想、感情」をいったん放棄することである。

この前提の下に、愛国主義をも考え直すことが次ぎの仕事となる。愛国主義の批判的考察事態が「驚愕」に値しよう、とミヘルスは挑戦的に述べる。何故なら、愛国主義は「自明の理」と見なされているからである。

しかし、実際問題として、祖国を持っていないという非難は、「最大の侮辱」を意味させられている。

愛国主義は、ナショナリズムとショーヴィニズム、戦争の「自然」の前段階をなす。歴史的にみても、愛国主義のいわゆる「英雄的行為」も、「残虐、非道、非道徳」以外の何者をも意味しない。政治生活のすべてのスローガンは愛国主義に帰着する。しかし、「正しかりうと、そうでなかりうと、わが祖国」と叫ぶ者は、「まさしく、道徳的感性の驚くべき欠如の犠牲者」である。

そもそも、その「祖国」とはなにか。

1) 生地 (campanilismo)。これは、「生まれつきのもの」で、人間の心情の発展の中でも、「もっとも愛らしく、詩的な花のひとつ」と、ミヘルスは肯定的に述べる。しかし、この感情は、ミヘルスによれば、大規模の愛国主義には論理的につながらない。「生地への愛は、愛国主義を説明しない。」交通、通信の発達した現代社会では、故郷を持たない人も多い。

2) 「血族, 民族, 人種 Rasse」, 説。ユダヤ人にドイツへの愛国主義をもとめることはできない。そもそも人種概念ですら曖昧ものはない。ドイツ人でも, 人種的に, ほとんど混血現象ではないか。ライン地方のドイツ人農民は, フランス人とこそ経済的に近い。よって, 人種, 民族による愛国主義定義は, 「ひとつの幻想でしかない」とミヘルスは結論づける。

3) 愛国主義=経済的「利益共同体」説。これは, 階級の存在とプロレタリアートの国際主義を全く無視する。道徳規範が人種, 民族というより, 「経済的階級」の違いに基づく, というのがミヘルスの持説である。性道徳, 婚約のモラル, 決闘観がその事例を供給する。階級間にこそ「感情世界の亀裂」が存在する。さらに, 資本自身が「国家的愛国主義」を容易に超えて, 商品と労働力を売買する。ミヘルスは, それを資本の「エクソダス」と呼んでいる。

4) 結局, 祖国=国家説しか残らないことになる。つまり, 「国境で仕切られた国家という歴史的形成物への愛」である。しかし, これでは, 愛国主義がかわいそうというもの。というのも, その場合, 愛国主義は「偽装された階級エゴイズム」以外のなにものでもなくなるから。国家がブルジョア階級と官僚のものだからである。そこでは, 祖国(国家)を特徴づけるのは, 「強制, 戦争, 王朝間結婚」であり, キリスト教精神でも自決主義でもない。よって, 国家は, 祖国<愛>というような「貴重な感情」を説明できない。

国境は, 偶然によって変えられるのみならず, 愛国主義と階級対立とは矛盾する。プロレタリア大衆に対して, 祖国(=国家)は, 強制(宗教と兵役)と「文化的悲惨」以外の何者をも提供しない。彼らにとって, 愛国主義による戦争に対する返答は, 国際主義の人類愛によるゼネストと革命, これしかない。要するに, 愛国主義には「現実的土台」が存在しないのだ。これが, ミヘルスの結論である。愛国主義は, 「決して美しくない妄想」であり, 「せいぜい, 道に迷った理想主義」である。

しかし、にもかかわらず、実際問題として、愛国主義は無視できない力を発揮する。その力の源泉を、ミヘルスは経済的動機（階級の利害とそれを守る権力手段を共同幻想化する）、心理的動機（外国人に対する無知と偏見、それに基づく軽蔑と反感）、そしてイデオロギー的動機（道に迷ってはいても、ひとつの「理想主義」として、人々を捉える）に求めている。

最後にミヘルスは、文化的愛国主義にふれている。しかし、ここでも、「民族文化」にたいする「欧州文化」の存在を対置する。「我々の新しい文化の時代が始まっている」とミヘルスは述べる。社会主義がその文化的普遍性を保証する。文化としての社会主義の普遍性という命題は、ミヘルス自身の人生に裏づけされたものといえる。

ミヘルスの愛国主義観の中心にあるものは、普遍性と合致した特殊性という発想である。愛国主義を偉大にし、倫理的に高め、神聖なものとしての権利を認めるのは、個人の自由と平等、民族の自決（これらをミヘルスは文化と考える）である。フランス革命とその愛国主義に「栄光」を与えたのは、フランス人の地理的、人種的な愛国主義ではない。「相対的な自由への愛」——すなわち、相互的な自由の承認であろう——であった、と。「文化のみが、愛国主義にとって倫理的契機なのだ。」国際主義と文化と倫理とが、愛国主義と融合する場合には次のようになる。

「真の愛国主義は、祖国愛を外国民族の抑圧と、祖国の拡大と、自国の下層階級の抑圧に見出すのではなく、逆に、自己の全頭脳、全神経を次のような目的に固定する人間の愛国主義である。すなわち、巨大な大衆を、道徳的、経済的、知的に向上させ、彼らの真の人間に値する生活、学問の成果への全き参加を助け、彼らに祖国での自分たちの労働の全き収益の権利を確保する、という目的である。」(p.31)

青年ミヘルスにとっての理想的愛国主義のモデルは「新しいドイツ語の意味」ではなく、「本来の、古いフランス語の意味」であることは、別のところでも、イタリアの革命的愛国主義者カルロ・ピサカーネの本を

共感をもって紹介していることから分かる。

ミヘルスが社会主義の思想、運動、組織で考察したことは、民主主義一般にもあてはまる。組織と官僚制、大衆像にふくまれた矛盾（エゴイズムと情熱）、リーダーシップとオリガークー、組織原理と政策の関係等、今日の民主主義をも悩ます問題にミヘルスはこれから取り組み続けよう。

注

- (1) モムゼンは、SPDの側にも責任があるという。〈ブルジョアジーの学問〉に対する、〈いつもの侮蔑的言説〉がそのような迫害を招いた。さらに、ドイツの学者の沈黙が〈臆病〉に基づくとするSPDの説にウエバーは反論した。「この沈黙をもたらしたリアルポリティークについては、わたしは、率直の語っており、忌まわしいものと思うので、決して与するものではないのだが、このリアルポリティークが、われわれの世界でしばしば、人間的に軽蔑すべき動機に基づかせるべきかどうか、私には疑わしい。」W. J. Mommsen, *Max Weber und die Deutsche Politik 1890-1920*, 1974, S. 120-121.
- (2) ミヘルスの著作からの引用は、本文や注でことわらない限り、“Opere di Roberto Michels” in *Studi in Memoria di Roberto Michels*, Annali della Facoltà di Giurisprudenza, vol. XLIX-1937-Seie V-vol/XV, R. Università degli Studi di Perugia. p. 39-76にあるミヘルスの文献目録の番号で本文中に略記する。1906年分は本稿末尾に掲載してある。
- (3) Pino Ferraris, “Roberto Michels politico (1901-1907)”, *Saggi su Roberto Michels*, Pubblicazione della Facoltà di Giurisprudenzadella Università di Camerino 40, 1993. p. 121-122.
- (4) 安世舟『ドイツ社会民主党史序説』お茶の水書房、1990年、158-9頁。
- (5) ミヘルスは、サンディカリズム＝反政治的、というのは明らかに誤解であり、常備軍反対などでは、ひじょうに政治的である、と別のところでも述べていた。N. 183. p. 797.
- (6) ほぼ二倍近くに加筆されて、伊語版が1908に一冊の本として出された。翌07年に同じく『アルヒーフ』に発表された「イタリア・マルクス主義への歴史的・批判的入門」とともに、後の「イタリア社会主義運動の批判的歴史」（1926）を構成する。

ここで、この論文の目次を紹介しておこう。

「イタリア社会主義運動におけるブルジョアジーとプロレタリアート」  
——イタリア社会主義者の階級と職業分析の研究——

I. インターナショナル・イタリア支部

II. イタリア社会主義政党

[党全体の構造] [南イタリア] [イタリア社会党の支配的構造]

III. PSI に投票する人

(1) 導入的注解

(2) イタリアの選挙権

a) 情勢 b) 影響

(3) イタリア社会主義者の数量的確認と歴史的眺望

(4) PSI への投票者と党員の比率

(5) 工業社会主義と農業社会主義について

(6) 社会主義と宗派

(7) プロレタリアート選挙民

a) 統計

IV. イタリア社会主義運動の社会的構成の随伴現象とその発展傾向

(1) 序

(2) イタリア社会主義における倫理的モメントとの優位

(3) イタリア社会主義運動内部での「階級闘争」

(4) 社会主義労働者政党にとってのブルジョア指導層の危険性の問題

(5) 中間層の社会主義政党に及ぼす影響

(6) 社会的構成の帰結：サンディカリズム

(7) プロカッチ『イタリア人民の歴史』II (豊下楯彦訳), 未来社, 1996, 210-211頁も参照。

(8) “Il Divenire Sociale”, “L’Avanguardia Socialista”, “La Lotta Proletaria”, “Il Sindacato Operaio”, “Lotta del Lavoro”, “Il Socialista”

(9) 以下は, 相田慎一「第二帝政期ドイツ社会民主党の社会的構成をめぐる論争 (1905-06年) ——ブランクからミヘルスへ——」(専修大学環境科学研究所), 第4巻, 1995, に依拠した点が多いことを, 謝して, 注記しておく。

(10) といっても, 「社会主義政党の側から公式に提示された資料ですらいかに欠陥があるか, 社会主義世界の統計的知見にとって, 私人にはとほうもないほどの障害が立ちはだかるか」ということを, 述懐している。N. 183. S. 835)

(11) 拙訳, ロベルト・ミヘルス『ドイツ社会主義におけるサンディカリズム的底流 (1903-1907)』神戸学院法学, 23巻第4号, 1993年10月, 96頁。

- (12) 安, 184頁。
- (13) 同上, 158頁。
- (14) 同上, 199頁。
- (15) Michels, *Le socialisme allmend après Manheim*. «Le Mouvement Socialiste», II<sup>e</sup> série, IX<sup>e</sup> année, N. 182, p. 5-22.
- (16) Ferraris, p. 134.
- (17) Michels, *Il Proletariato e la borghesia nel movimento socialista italiano*, 1908. p. 373.
- (18) É. Berth, *Proletariat et Bourgeoisie dans le mouvement socialiste italien*, Le Mouvement Socialiste, N. 179, octobre 1906. cf. Ferraris., *ibid.*, p. 135
- (19) Michels, *Controverse socialite*, Le Mouvement Socialiste, n. 184, marzo 1907.
- (20) A. Mitzman, *Democracy and Estrangement. Three Sociologists of Imperial Germany*, 1973, p. 303, D. Beetham, “From socialism to Fascis : The Relation Between Theory and Practice in the work of Robert Michels”, in, *Political Studies*, No. 15, p. 9. cf. Ferraris, p. 144.
- (21) *ibid.*, p. 146.
- (22) cf. Dora Marucco, *Arturo Labriola e il sindacalismo rivoluzionario in Italia*, Torino, 1970. p. 10.

文 献 目 録 (1906)

- (A)
- 166. *Proletariat und Bourgeoisie in der sozialistischen Bewegung Italiens. Studien zu einer Klassen-und Berufsanalyse des Sozialismus in Italien*. «Archiv fuer die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung»  
Band. III, H. 2 S. 347-416, Bd. IV, H. 1 S. 80-125, Bd. IV, H. 2, S. 424-466, Bd. IV H. 3, S. 66-4720.
- 167. *L'Allemagne et la guerre contre la France*. «L'European», Courrier international; hebdomadaire, politique, droit international, questions sociaux, literature, art. Vie année, N. 216.
- 168. *Les socialistes allemands et la guerre*. «Le Mouvement Socialiste»  
I le série, VIIIe année, N. 171, p. 129-139.
- 169. *Discorrendo di socialismo, di partito e di sindacato*. «Il Divenir Sociale», anno II, N. 4, p. 55-57.
- 170. *Die Kriegesgefahr und deutsche Arbeiterbewegung*. «Die Einigkeit», Organ der Freien Vereinigung deutscher Gewerkschaften, 10. Jahrgang, N. 21, 22 3,

- 24 5.
171. *Cesare Lombroso der Gelehrte und 'Rebell'*. «Die Gesellschaft», Sozialistische Wochenschrift, 2. Jg. H. 20 S. 236-239.
172. *Polémique sur le socialisme allemands*. «Le Mouvement Socialiste» I le série, VIIIe année, N. 176, p. 228-237.
173. *Der italienische Parteitag zu Rom*. «Die Gesellschaft» 2. Jg. H. 4, S. 46-48.
174. *I sindacati tedeschi e la lotta contro la disoccupazione*. Relazione presentata al Primo congresso Internazionale per la lotta contro disoccupazione, a Milano, ottobre 1906, 59 p.
175. *Erotische Streifzüge. Deutsche und italienische Liebesformen. Aus dem Pariser Liebesleben*. «Mutterschutz», II. Jg. H. 9 S. 362-374.
176. *La morale des finaçailles*. «L'Humanité Nouvelle». Revue Internationale scientifique et littéraire, 2e série, N. I, p. 90-96.
177. *Aus der italienischen Sozialdemokratie*. «Rheinische Zeitung», 15. Dezember
178. *I Cattolici e lo scioglimento del Reichstag germanico*. «Rivista Popolare», anno XII, N. 24, p. 656-658.
179. *Divagazioni sull'imperialismo germanico e la questione del Marocco*. «Riforma Sociale», sconda serie, vol. XVI, fasc. I, Estratto, 23 p..
180. *L'Allemagne, le socialisme et les syndicats*. «Revue Internationale de Sociologie». Estratto, 12 p.
181. *Patriotismus und Ethik. Eine kritische Skizze*. Lipsia 1906. Diederichs, 32p.
182. *Die deutsche Sozialdemokratie*. «Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung», Band. XXIII, H. 2, S. 471-556.
183. *Zur Geschichte des Sozialismus*. «Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung», Band. XXIII, H. 3, S. 786-843.

(B) (A) 以外の論文等

*Il primo congresso internazionale per la lotta contro la disoccupazione. (Milano, 2 e 3 settembre 1906)*. La Riforma Sociale, anno XIII-vol. XVI.